日蓮大聖人御書全集

だいびやくくしやしよ

大白牛車書

新版
2151

だいびやくごしやしよ

大白牛車書

そ ほけきようだいに まき い ほうじよう じよう ただ

夫れ、法華經第二の卷に云わく「この宝乘に乗じて、直

ち道場に至る」云々。日蓮は建長五年四月二十八日、初

めてこの大白牛車の一乘法華の相伝を申し顕せり。しか

るに、諸宗の人師等、雲霞のごとくよせ来り候。中にも

真言・浄土・禅宗等、蜂のごとく起こり、せめたたかう。

にちれん だいびやくごしやしや うし つの さいだいいち もう 戦

日蓮、「大白牛車の牛の角、最第一なり」と申してたたかう。

両の角は本迹二門のごとく、二乗作仏・久遠実成これな

り。すでに弘法大師は法華最第一の角を最第三となおし、

りよう つの ほんじやくにもん にじようさぶつ くおんじつじよう

こうぼうだいいし ほつけさいだいいち つの さいだいさん 直

つの ほんじやくにもん にじようさぶつ くおんじつじよう

こうぼうだいいし ほつけさいだいいち つの さいだいさん 直

つの ほんじやくにもん にじようさぶつ くおんじつじよう

り。すでに弘法大師は法華最第一の角を最第三となおし、

いちねんさんぜん

くおんじつじよう

そくしんじようぶつ

ほつけ

かぎ

一念三千・久遠実成・即身成仏は法華に限れり、これをも

しんごん

きよう

ほうぼう

やから

せ

真言の経にありとなおせり。かかる謗法の族を責めんと

かえ

あだ

そうろう

たと

つの

直

するに、返つていよいよ怨をなし候。譬えば、角をなおさ

うし

殺

そうら

んとて牛をころしたるがごとくなりぬべく候いしかども、

そうろう

いかで、さは候べき。

くるま

もう

ほんじやくにもん

わ

そもそも、この車と申すは、本迹二門の輪を

みようほうれんげきよう

うし

懸

さんがい

かたく

しやうじしやうじ

妙法蓮華経の牛にかけ、三界の火宅を生死生死とぐるりぐ

回

そうろう

くるま

しんじん

轄

るりとまわり候ところの車なり。ただ信心のくさびに

こころざし

油

差

たま

りようぜんじようど

詣

たも

志のあぶらをささせ給いて、靈山浄土へまいり給うべ

し。また心王しんのうは牛うしのごとし。生死しやうじは両りやうの輪わのごとし。

でんぎようだいしい しやうじ にほう いっしん みやうゆう うむ にどう

伝教大師云わく「生死の二法は一心の妙用、有無の二道は

ほんがく しんとく うんぬん てんだい じゆうによ ないしこんきよう

本覚の真徳」云々。天台云わく「十如はただこれ乃至今境

たい うんぬん もんしやく よ よ あん たも

はこれ体なり」云々。この文釈、能く能く案じ給うべし。

なんみようほうれんげきよう なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

じゆうにがつじゆうしちにち

十二月十七日

にちれん かおう

日蓮 花押